

やすらぎ



「歎異抄」(第三十二回)

標 暁 講述

きわめて深い庶民的な感覚で宿業を説いて下さっている。

「歎異抄」 第十三章 続き
「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし」とこそ、聖人はおおせそうらしいに、当時は後世者ぶりして、よからんものばかり念仏もうすべきように、あるいは道場にはりづみをして、なむなむのことしたらんものを、道場へいるべからず、などということひとえに賢善精進の相をほかにしめして、うちには虚仮をいだけるものか。 (真宗聖典六三四頁)

しかるべき業縁があつたならば、どんなことでもする。我々が身に具えている悪は、縁があればどんなことでもする。今、縁がないのではないだけのことである。親鸞聖人は、透徹した眼で人間を見通し、人のことではなく、自覚として仰っている。

「後世者ぶり」とは、私は既にたずかっているのだ、私以上の信者はいないのだと誇らしげにしている人、信心者ぶっている人のことを指す。当時、そのような人が指導者としてお弟子を集めていた。善行者だけがお弟子にならないと、人から非難されるような人が道場に来てもらつては困ると、こういう表明をしている。いかにもそれが道理かのように云つてはいるが、実はそれは自分のところの繁栄を願っているわけである。お念仏を弾圧する為政者と手を組み、自分の地位を向上しようという下心。うちには悪人はいない、善人だけで教団が成り立っているのだから、弾圧などはせずに援助して下さい、という下心がある。一生懸命、善行を励む姿を外側に示し、内には本願を疑うような偽りを抱いている、つまり、偽善的

光照寺寺報

発行所
宗教法人光照寺

〒331-0821
さいたま市北区別所町102-2
電話：048-651-2781(代)
FAX：048-651-2753
E-mail
yasuragi@beige.ocn.ne.jp
ホームページ
http://www8.ocn.ne.jp/~koshoji

発行人
池田孝郎

生活をしているわけである。そういうお弟子がいたことにより、偽善的行為は許さないと厳しく批判されている。

私の問題として考えた時、ここは厳しく問われる問題である。例えば、刑務所から出所してきた人がお寺に訪ねて来て、私は今先ほど刑務所から出てきた。仏法を聞きたいので、しばらく寺にご厄介になりたい、と云つてこられたら、どうぞ、と云えるかどうか。お金も行くところも無いが、たすかりたいと思うので寺にいたいと云われても、私に嘘を云つてまた何かやるのではないか、騙しにきたのではないか、という具合にとるのだと思う。偽善者であるかないかは、事に当たつてみるとはつきりしない。自分は偽善

者でないつもりであっても、偽善者で暮らしていることが多い。人前で立派なことを云つていても、腹の底ではそうではないことが多い。外側だけ立派な姿を見せて善人面していても、内には偽りを抱いているものである。当時のことと現代とを、常に自分の身の上を受けて、この第十三章を読ませていただいた時、倫理、道德の世界だけでは人間は決着しないのだと、はつきりと頷かさせていただくことができるのである。

(当寺)ご法話抜粋要約、文責副住職(釈徹照) 次回へ続く



第四回目 子供会参加者

孟蘭盆会法要 光照寺護持会総会報告 旅行記

この度の東北地方太平洋沖地震の災害により尊い生命を奪われた方々に、謹んで哀悼の意を表します。被災され深い悲しみと大きな不安の中に苦しい生活を余儀なくされておられる方々に、心からお見舞いを申し上げます。

詳細は三頁
詳細は四頁
詳細は五頁

む げ こう 無 碍 光

一凡夫が仏になる法一

住職 池田 孝郎

この度は東北地方太平洋沖大地震をキーワードに考えを展開してみたい。

亡くなられた方々に哀悼の意を心より捧げ、念仏申さずにはいられませんか。又、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

この記事を書くことも重く、何にも出来ない自己に深く懺悔し、自己に何が出来るかを問いつつ筆を進めてみたいと思います。

三月十一日(金)、午後二時四十六分、外出先で地震に遭遇しましたが、私は今年六十九歳になりましたが、人生ではじめてこれ程の強

い地震を体験しました。百年に一度、否、千年に一度といわれるM九・〇の太平洋沖プレート連動によるものですから六十九年間の体験では当然はじめてであることです。阪神淡路大震災、関東大震災は報道の記憶として鮮やかにあります。記憶と伝承と予知と実体験の相違は如実に違います。

丁度、この三月親鸞聖人七百五十回ご遠忌で、埼玉組の寺院と上山参拝の予定でありましたが、本山よりご遠忌の三月の第一期は中止し、震災の「支援のつどい」に変更し、上山の勧めもありご門徒と共に二十二名で三月二十六日に上山して参りました。

この事が自分において何が出来るかの一步でありました。

この震災でまず耳に入ってきた言葉は、「想定外」という言葉でありました。太平洋沖のプレートの「連動」も、福島第一原発の津波による被災による、五重の安全神話も脆くも崩れ、「想定外」との釈明に戸惑いを覚えました。

自然への畏敬の念の喪失と、人間の傲慢への警鐘と思わざるをえません。人間が自然を征服し、科学文明、科学信仰の絶対性への警鐘と深く受け止めます。

願わくば、大いなるものへの畏敬の念と、人間の罪業性への目覚

めとなり、信仰心の回帰の萌芽となります様、願わずにはいられません。

三月の開法会「親鸞聖人のみ教えに聞く会」に於いて、樸暁先生は曾我量深先生の經典の言葉として「逆縁教興」を示して下さいました。誠に願わくば、この悲しみの事実を縁として、仏教に帰依し、念仏の教えが興ることを願うばかりであります。

自力無効の果てに、既に如来が誓願を立て、如来の大慈悲心をもつて回向したまう本願を信じ念仏申す時でありましょう。

この度の上山で武田龍師がご法話の冒頭「念仏者は、どんな時でも立ち上がって行く」とお話しされた時、熱いものを感じ、「そうだ、この七百五十年、戦乱や飢饉、自然災害や、疫病の中も、念仏申し立ち上がり、念仏まこと、仏法まことを伝えて下さっている歴史、伝統が今ここに生き、集う人々の中に感得されていると感じた時」お念仏申さずにはいられませんでした。同朋唱和で「正信偈」が響き渡ったのも、その感動と確信が共感された現われでありましょう。「ただ念仏」の教えの深淵に触れた憶いでありました。

如来まします世界を感得し、生死を超えて念仏申して行きましょう。

真の依り処

大地震の時私は車を運転中でした。

右側のビルがヒュウヒュウうねりながらなくなって倒れてくるのではないかと思いました。左側のビルから人々が飛出して外の柱につかまりキャキャとわめいていました。

大変な災害が起った、急いで帰宅しテレビを見ましたのですが言葉になりません。ア〜どうか死なないで生きて下さいとお念仏申すしかありません。被災者の方々は肉親を亡くされ、又、行明不明で影も形も見つからずほんとうにこの世の出来事とは思えません。先日あるお坊さんがテレビであの状況を考えるにあの地方は佛法の土徳の深い所であります。法のお力を受けて復興してほしいとお話しされていました。何も出来ないこの私もどうかこの真宗の本願力の用きによって救われてほしいと思えばかりです。合掌

岡田ノリ子

鈴の音

苦しみがなくならないことは、その苦しみを生かしていくことができるということ

蓬茨 祖蓮
(「教行信証」の基礎講座)

盂蘭盆会法要

- ・8月13日(土)
第一部(午前)9時30分受付
午前10時～11時30分まで
第二部(午後)1時受付
午後1時30分～3時30分まで
- ・光照寺本堂にて
- ・勤行・法話

※準備の都合上、出席人数と午前か午後の参詣をご連絡下さい。
預骨、初盆の方は率先してお参り下さい。
また、どなたでもお参りできます。
真宗のお盆に触れて下さい。ご参詣をお待ちします。

お盆参り

- ・7月13日から16日の期間
- ・8月1日から16日の期間
(13日は除く)

※ご希望の日にちをお知らせ下さい。
時間につきましては、こちらで調整して連絡させて頂きます。
ご自宅か当寺のいずれかで読経いたします。

お盆



三月十一日二時四十六分、東北地方太平洋沖地震(M9)の大地震によって、津波、福島原発の事故、連動する地震、液状化現象と次々と災難が襲いかかり、災害復興の課題は多々残されている状況にあつて、被災地の方々は当然の如く、関東に在住する私達も震災の不安を抱えつつ日々を過ごしています。報道によれば、火葬もできず、死者を土葬せざるを得ない地域もあつたという。

蓮如上人の「白骨」の『御文』では、「朝には紅顔あつて夕べには白骨となる身」と教えられ、法事の度にお称えしてきたのですが、今まさに震災の悲惨な状況から、無常な現実、有りうべき一瞬一瞬だということを感じ付かれました。
蓮如上人は「安心の一義」の『御文』で「当流の安心の一義というのは、ただ南無阿弥陀仏のこのころなり」といっただいて、本当に安らいでいける世界を指し示しています。
亡き人を偲び、お盆法要を通して、本当に安らいでいく世界のこころを感じていければと思います。
お盆法要は二部制にて厳修致します。多数のご参詣をお待ちしております。
副住職(釈 徹熙)

ひとくち 歎異抄

羅漢：人が人をたすけるとは如何なるものか。

「今生に、いかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。第四章。」



人間の慈悲は一貫しない。念仏申すところに如来の慈悲が末え通る。

川越喜多院の五百羅漢



いちご狩りを終えて



夏のお泊まり (H22)



楽しかった花火 (H22)



花まつり 大宮霊園にて



甘茶かけでドキドキ

護持会総会報告

淡海雅子

平成二十二年度第十二回光照寺護持会総会が六月五日十時から光照寺本堂において多数の会員が参加され開会されました。

勤行（正信偈同朋奉讃）に続き、全員で婦人部と子供達の有志に合わせて仏教讃歌「真宗宗歌」・「恩徳讃」・「衆云」を唱和しました。

法話は広島県元豊平道場主佐々木玄吾師に蓮如上人御一代記聞書より「そらごと申さじと、嗜む」と題しお話をいただきました。そらごとを言わないことは大切であるが、人間は虚栄心の為に嘘を付かないとは言えない。心に偽りあらじと嗜む人は「よきことはならぬまでも、嗜みまし」ということで信心への道（聞法、勤行、念仏）として継続一貫積極的聞法を努めるが、そこに「真心あるか」という問いの前に転落しこれが本当の南無阿弥陀仏となっていくのであると話された。嗜みとして孫を仏前に導くことは年寄の最高の仕事であると結ばれました。

総会は佐々木玄吾会長を議長に議案に入り、前年度の護持会の活動実績及び、護持会の収支決算と監査が報告され全会一致で承認されました。今年度の活動計画案及び、収支予算案が提案され何れも原案通り可決承認されました。

昨年度は五月に親睦旅行で沖縄を訪問し、また平成二十三年三月に「親鸞聖人七百五十回忌御遠忌法要」に合わせ上山いたしました。震災直後であった為、被災者支援の集いの法要でした。今年度は秋に親睦旅行を計画しており皆様の参加を願っております。

副住職様より聞法会の内容紹介と参加の呼びかけ、大塚陽子さんより子ども会「ポニークラブ」の活動報告がありました。

御住職様より昨年は二十回目の報恩講が勤まり年表を作成した報告がございました。現在は宗教離れといわれ、無縁社会も問題となっております。震災を通して人間の自然に対するおごりを感じ、科学信仰に対する警鐘を受けました。今年度は新しい節目のスタートです。これを機会に宗教への回帰を望み、共に慚愧、懺悔して次世代へ真宗を伝えたいとの意気込みを述べられました。

その後、お斎をいただきながら始めるの参加者の自己紹介と感話発表がありました。引き続き絵解きサークルにより「三河白道」が解説されました。全優亭表彰さんによって落語「天神山」が演じられ笑いに包まれ和やかな時間を過ごしました。

最後に全員で仏教讃歌「恩徳讃」を唱和し閉会いたしました。今後とも皆様方のご支援、ご協力をお願い申し上げます。



全優亭表彰（本名；山河秀夫氏）の落語



婦人と子供による仏教讃歌合唱



平山氏の感話



絵解きサークル発表



光照寺、旅行記

平成二十三年三月二十五日～二十

七日「光照寺旅行 京都上山」参加者の方々の感想をお寄せいただきました。参加者の皆様にこの紙面をお借りして御礼申し上げます。

(編集長 副住職)

【旅程表】

一日目

東京駅→京都駅→比叡山延暦寺参拝・西塔(にない堂・釈迦堂)・東塔(大講堂・根本中堂)→おごと温泉泊

二日目

おごと温泉→本山(被災者支援のつどい)参拝(宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要は東北地方太平洋沖地震の為、三月は中止により追悼法要に変更)→名古屋別院参拝勤行→高浜やきものの里かわら美術館→白鳳瓦工場見学→蒲郡温泉泊

三日目

蒲郡温泉→海産物買物→三河別院参拝勤行→岡崎城見学→豊橋駅→東京駅

「御遠忌」と「支援のつどい」に憶う

住職 池田孝郎

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要の期間に東北地方太平洋沖大地震に遭遇し、急遽、震災の「被災者支援のつどい」の法要に変更しての京都上山となりました。

三月二十五日、朝七時四十五分東京駅集合の中、早朝にもかかわらず全員二十二名早めにそろい、お一人、お一人の上山の決意を肌で感じ、感銘致したことです。

第一日目の比叡山ですが、今回で私は三回目になります。同じ比叡山でも時の経過と季節の違いで雰囲気があるようで違って感じられます。この度の比叡山は、法然上人八百回大遠忌と親鸞聖人七百五十回御遠忌が重なり、装いも違っておりました。比叡山は鎌倉仏教の祖師方を輩出した天台宗のお山です。法然上人、親鸞聖人をクローズアップして準備されているのも頷けます。特に感動致したのは、通常、修行中との事で公開されない「西塔の「にない堂」

に入ることの出来た驚きです。

「にない堂」は聖人が堂僧として勤めたといわれる「常行三昧堂」であるからです。中央に阿弥陀如来の本尊があり、その回りを念仏して昼夜を通し修行されるところのこと。聖人の若き叡山の「苦勞を偲ばせて頂きまし

大きく伽藍に響き渡る。胸に込み上げる憶いに感涙する。歴史の一頁を踏み、決意を新たに、如来・聖人にお誓い申し上げ、本山を後にする。

三日目は名古屋の(株)白鳳社の瓦の本山葺替え瓦製作工場を拝見。社長さんと邂逅す。一期一会に合掌する。



御影堂前にて

被災に憶う

坊守 池 田 邦 子

去る三月十一日(金)午後二時四十分マグニチュード九・〇、東日本太平洋沖大地震が発生、かつてない想定外の被害に見舞われました。埼玉組寺院として、当寺も予定しておりました三月二十五日〜二十七日親鸞聖人七百五十回御遠忌上山が、「被災者支援のつどい」として本山の意向により勤まる事と相成りました。本山においても大揺れの決断となった事と思います。

当寺に於いては、住職のこのような時なればこそ、との強い思いをもち中止はせず二十二名の御門徒の方共々上山が果たせた事を、私は大変満足しております。

本山到着時は被災者の方々の涙雨を思わせる様な強い雨風だったが、



法要後はカラッと雨もあがり、全く劇的な天変地変をまざまざと体験をし、どんな事も起こり得る事を実感致し

ました。

その後、比叡山の深閑としたたづまいの中を聖人の二十年間の修行の様子を伺い、山を降り尊いみ法を教え伝えられた聖人の御苦労に思いをはせた事でした。

この度、東北地方で被害に遭われた方々に対し良く聞こえてくるのが「私に出来る事は」と云う言葉でした。私に何が出来たのかそれは今現在、自分に被害が及ばず傍観者として良い所において、わずかな協力をし得ると云える自己満足にすぎない私自身、懺悔の思いが頻りに湧いてくる。テレビで悲惨な情景が写し出される度、ガレキの撤去作業も出来ず、せめてと僅かな義援金を送る事が私に出来る精一杯の気持ち、町の復興再生に何年かかるか、私において協力的な気持ちが続出来るのか如来のもらさず救いとして止まじのお心を思いつつ、あいまいな喪失感を抱きつつ、将来を見ずして行かなければならぬ方々の心のケアもどう対処をして元気づけられるのか私の問題として重く考えて行こうと思う。

台掌

御遠忌法要から被災者支援のつどいに参拝すること

副住職 池 田 孝三郎

五十年に一度の大法要に参拝できるということは一生に一度合えるかどうかの機会です。待ちに待った宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌に参拝する準備が整い、あと二週間後と迫った三月十一日「東北地方太平洋沖地震(M9)の大地震が発生、そして、津波、福島原発の事故、連動する地震、



比叡山にて

東日本全体が震災における大混乱が生じ、不安の真つ只中、御遠忌はどうなるのか大変心配されましたが、「被災者支援のつどい」として法要を営むという本山の決断があり、光照寺は上山するという一心で、参加者二十二名と日程通り上山することができました。

法要当日、三月というのに朝は雪がちらつく寒さでした。それでも御影堂は大勢の参拝者で埋め尽くされ、「御遠忌から「被災者支援のつどい」として営まれる法要にあたり、とても緊張高まり、荘厳な雰囲気の中、勤まりました。法要中は、真宗に出遇ったご縁を思い起こしながら、宗祖の歩みと願われた世界を憶念し、震災で被災された方を偲ぶという気持ちでお念仏申していました。

法要中も京都から帰ってきた今も、頭に張り付いている課題があります。それは、宗祖親鸞聖人は雪害における大飢饉を慮り、衆生利益を





るという内容の違いは、個々に「苦悩するいのちを生きる」ということは共有されています。『観経』に教えられるよう

念じて三部経を何日も誦誦してやめたということが伝えられています。が、その時の心境はいかばかりだったのでしょうか？ 自力の執心の根深さに気付かされ、念仏の一道にたしかえる。その心中は如何なるものだったのかと、この問いを宗祖に尋ねたいという気持ちがとても強くなりました。

『大経』に「無有代者」(だれも代わる者なし)という言葉がありますが、私という存在は誰とも代わることができない「私」です。悲劇に直面するのでも代わることができません。悲しみを悼むことはできても、当事者になり代わることができません。そして、自分の生活をするのに精一杯という現実。「生きる」と云っても被災された人と被災していない人の生き

に、悲劇が浄土を願う機縁として、真実の光明に遇うことを念じて存在の大地を踏みしめていきたいと思っ



います。その意味で今回の「御遠忌」から「被災者支援のつどい」の法要が営まれたことへの参拝が今後の私に問いを投げかけて下さったと思っています。

上山の感想

池田 孝太郎

今回の上山、京都旅行に息子の勇希と一緒に同行させて頂きありがとうございました。

震災直後という事もあり、光照寺も、行かれた方がいろいろな想いをもつての上山ではなかったでしょうか。

以前、帰敬式で来た時にすべて覆われていた本堂も瓦を葺き替えられ荘厳な姿を現しており、また、かなり自肅により上山の人数が少ないと聞

きました。が、これでも本堂を埋めつくした全国の門徒さんをみて、ものすごいパワーというか皆さんの願いの力を感じました。

親鸞さん七百五十回御遠忌という節目の中こうして歴史を感じ、今を生きている、生かされているという自分を感じるこの出来る旅行であったと思います。

被災者支援のつどいに参加して

池田 孝次郎

五十年に一度のご勝縁、御影堂修復も完成し親鸞聖人七百五十回御遠忌団参旅行をととても楽しみにしておりました。それは何故かと云いますと、まず一つに宗門に身を置くものとして五十年に一度の歴史的法要だから参加しておきたいという気持ちから、もう一つは自分自身の人生における大きな転機を迎えた機縁にあたる時節もあり本山へ参拝したい気持ちからです。残念なことに、三月二十六日中法要の参拝予定でしたが、この度未曾有の東北関東大震災被災者への配慮により、第一期法要は中止となり「被災者支援のつどい」へ変更になったと二十五日出発当日に



阿弥陀堂前にて

お聞きしました。第一期法要中止と聞いたときは少し驚きとショックがありました。が、いろいろな側面からの配慮もあり本山の決定もそれはそれでやむを得ないことと理解しました。ということで七百五十回御遠忌としての参拝ではなかったのですが、参拝前日の夕食時までに翌日参

たが膝かけやカイロの配布もあり温かいご配慮を頂きほっこりとした気持ちで法要の開始を迎えました。大谷暢顕門首、安原宗務総長のお言葉を頂き、華美を控え目に慎ましやかなご法要が勤まりました。

災害でお亡くなりになられた方々へ心から哀悼の意をお念じ申し上げるとともに、この自然大災害に対して無力な自分自身であることを自覚し、慙愧懺悔の念仏をいたしました。

三月十一日からわずか二週間という時間経過であったこともあり、参加者からも話題にはやはり震災の話題が多く聞かれました。それだけ心への衝撃や影響が大きかったのだと思います。偶然にも聖人の御遠忌に発生した大震災と原発災害。この事



拝に向けての心の整理をした次第であります。参拝当日は雪が散らつき、御影堂内は凍てつくような気温でし

実は私たちに何を問いかけているのでしょうか。考えるとても良い機縁となりました。関係各位へ感謝申し上げます。

光照寺旅行に参加して

大塚 陽子

今年は、親鸞聖人七百五十回御遠忌による本山参拝旅行で、三月二十五日から二十七日の三日間で行ってきました。

ちょうど三月十一日に東北地方太平洋沖地震があり、地震と津波で大変な被害があり、また福島原発も破損して放射能の被害があり、本山としても御遠忌法要としては取りやめ、被災者支援のつどいとしての法要を営まれることになり、光照寺は増玉組の何ヶ寺かのお寺と団体で参拝する予定でしたが、他のお寺が地震の影響で旅行を取りやめる中、光照寺のみの旅行となりましたが、予定どおりの行程で、無事に行くことができました。

初日に向



てくる天台宗の総本山で、どんな所なのか山深い修行の地のイメージをもつて行きました。今回増玉組の団体参拝のために特別に一般に

は公開していないという、西塔の常行三昧堂を見せてもらいました。親鸞聖人もかつて比叡山で修行していた頃は、堂僧として常行三昧していたというので、この様な所で修行されていたのだと感慨深いものがありました。そこでは九十日間休息せず、阿弥陀如来の周りを一人で阿弥陀仏の名を称え、心に阿

弥陀仏を念じ、ゲルグルと歩き続けるという修行をするそう、座つてはいけないということ

で、少し休めるように回りに手すりがあり、唯一手すりにもたれることができるということ



名古屋別院前にて

他にも名古屋別院や三河別院を参拝し、岡崎城も見学しました。なかなか行けない様な所をたくさん回れてよかったです。

光照寺の旅行で一緒に参加された方や、光照寺にはお世話になり有り難うございました。

感動

岡 田 ノリ子

源信僧都は広く一代の教えを開き浄土の教えに重要なお念佛と往生要集を著されました。信仰深い奈良の田舎に生まれ父なき後は一家離散、母も尼僧になられた。源信は秀才で早くから頭角を現し宮中でお説法が出来るようになり沢山のプレゼントを頂いた。これは母のお陰だと思ひプレゼントを母に送った。その返事が信心深く賢いお母さん、このような事は本意ではない。私が真の救いを得られるよう、又、世の人々を導いて下さるよう願って山に上げたのだと、実に素晴らしいお母さんです。法然は智者のふるまいをせずただ、一向に念佛すべしと申されています。



両親の愛を一身に受け育ちましたが九歳の時、抗争が続き父が夜討を受け臨終の枕もとに幼い法然を呼び敵の者を怨んではならない。もし仇を討つたらその子が



おまえの命をねらいに来るであろう。そのような争いは世代が変わってもはてなことはい。敵の者を怨んではならない。

お父さんは信仰深い人でしたの

でしょう。誰れにもなかなか真似の出来ない事を教えておられます。親鸞聖人は比叡山で堂僧つとめをされておられたそうです。この度七百五十回御遠忌に大変寒く身が切れそうな日に上山する御縁を頂きました。その常行三昧堂でお念佛をしながら一回りさせて戴きましたのですが極寒の為足の裏が板面にすいついた感じがしました。この比叡で厳しい修行されたがどうしても自分は自力の道では救われない。その身をもって山を下り六角堂に参籠し法然上人の教えに遇われ、いつれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかしとご自分をうたわれ他力

の信心を広められました。新装になった御影堂で、震災から二週間後でしたので被災者支援のつどいという催事でした。大災害から私達真宗門徒、宗門は大いなる問いかけをいただいたものと受けとめなければなりません。阿弥陀様の温かいお慈悲が必ず救って下さると信じています。親鸞聖人は法はよく聞くべしと申されているようでした。

合掌

京都上山

小刀称 ゆり子

時折雪が舞う比叡山は寒かったけど流暢なガイドを賜り乍ら、西塔の弁慶のいない堂と言われる常行堂、法華堂、普段は入ることの出来ない行をされた所を見学させていただきました。

東塔では、国宝の延暦寺の総本堂である根本中堂を参拝千二百年の間灯し続いてきたと言う、不滅の法灯を仰ぎ見て歴史の時空を体感しました。



二日目、真宗本廟の被災者支援のつどいに



参加させていただきました。接待所ギヤラリーで中村久子展を拝し昔の事を思い出しました。私が二十才頃だったと思います。が、勤めていた会社で講演

がありお目にかかり驚きました。私が出たその年まで障害者にお会いする機会が無かったし、又、両手両足のない女性が子育てはもとより家事全般をこなされ五体満足の者には想像を絶するお話でした。社長が信心の深い方で朝礼の折りには盤若心経を唱える事が慣わしでした。五十人程の社員がいた中で私は他の人達より熱心だったような気がします。暗唱してましたから。あれから五十年、綾野小路さんの漫談ではないけれどすっかりお返ししてしまいました。一泊目の琵琶湖ホテル、二泊目は三河湾を望むホテル竹島で、佐々木文子先生と岡田さん田中さんの大先輩と御一緒させていただき実り豊かな楽しい夜でした。

三日目は三河別院と岡崎城を散策し、名古屋別院ではお茶のご接待をいただき乍ら当院の行事をビデオ鑑賞させていただきました。そしてかわら美術館と瓦工場を見学して帰路につきました。

東本願寺よりいただいた御遠忌記念の金銀の葩、五色散華模様と蓮池図、光照寺よりいただいた八枚の華鳥図は、この旅の心に残る大切なものになりました。感謝です。

親鸞聖人七百五十回御遠忌に参加して

川 澄 英 明

二年ほど前から上山のお話があり、是非参加したいと思っていましたが、限られた予定枠の中で参加できたことは大変嬉しいことでありました。

出発日を心待ちにしていた中で、



三月十一日とんでもない災害が発生し、たいへんおどろきました。本山で

は私達の上山の期間を急遽「東北地方太平洋地震災害被災者支援の集い」に変更され、多くのお寺が中止する中で、聖人の御遠忌に被災者支援プログラムが加わったというプラス思考でご英断されたご住職に感謝の気持ちでいっぱいです。

なぜこんな時にこんな大地震が、と感ずるところがあり、鴨長明の方丈記を思い出しました。親鸞聖人よりも十八歳年上の鴨長明が「方丈記」を著したのは五十七歳の頃ですから時代は重なっています。

この頃の京都は、平家が破れ源氏に移った頃で戦が度々ありました。安元三年の京都の町をこごとく焼き尽くした大火、治承四年の多くの家が吹き飛ばされた大風、その後の大地震や大阪の津波などの記述もあり、京都の道ばたに数万の死体が放置されていたなどの記述もあります。つぶさに読んでみると、東北地方の惨状そのままです。親鸞聖人も子



供の頃から、そんな中を生き抜いてこられたのでしょう。鴨長明はそんな経験からでしょうが、山中に方丈の小さな庵をむすび山菜や木の実を食べ、部屋に阿弥陀如来を置き念仏して老後を過ごしていたようです。

最終日は三河別院と岡崎城のある岡崎公園を訪れました。岡崎は亡くなった父の在所(三河)では実家のことを在所と言います。三河別院を案内してくださったお坊さんは、在所の隣のお寺の方でいろいろ話がはずみました。法事で人が集まると他の宗派の方でもここでは正信偈を良く知っていて、一緒に唱和すると言っていました。なんか嬉しくなりました。

雪の延暦寺

窪 田 剛 之

人間の耳とは不確かなものと思いました。「人間の」というと語弊があるかも知れないと思い、「私の脳と耳」はと言いなおさなくてはならない。今回の旅のメインは親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に出席するのは勿論ですが、実

際は三月の「東日本大震災」が起きてしまい「同被災者支援のつどい」と一緒に、東本願寺一体となって災害救援を支援してゆく為の活動を行うというものでした。

今回の旅程の中で興味をひいたのが比叡山延暦寺講堂めぐりでした。バスが比叡山の山波に入った頃より横なぐりの雪となり心配したが無事講堂めぐりができました。帰宅してから親鸞をはじめ各宗祖の方々が苛酷なまでの修行をしたと案内してくれた人の話でした。そこで冒頭に記した「耳と脳」との話ですが、ではそ



三河別院にて

の修行したという堂とは一体何という名の堂だったのか、パンフレットを見てはわからず私は何をぼんやりしていたんだろうかと思った。西塔東塔横川のうちのどれかと調べてみたがわからず、思いついて西塔居林事務所へ電話をしてやっと解りました。三塔のうちの西塔の「にない堂」のうちの「常行堂」ということがはつきりました。そういうえば弁慶の「にない堂」ということははっきり覚えていましたが、今回は特別に堂内を見学しその堂内の竹組みは、読経をしながら疲れや眠気をもよおした時、その竹によりかかってしばしの休息をとり九十日間の修行をしたとのことでした。私はその「常行堂」は独立していたと思ひ込んでいたのが間違ひでした。常行堂、法事堂併せてにない堂ということがわかり何とも人知れずうれしい思いがしました。私がかんり若くしてもそういう修行に一日として



耐えられたかどうかはなはだ疑問と云えましよう。旅に出て様々な所を見て聞いて感じる事のあることを感謝したいと思いました。 合掌

「東日本大震災被災者支援の集い」上山記

佐々木 玄 吾

東本願寺御影堂の中満堂の聴衆を前として、名古屋教区武田龍先生は次のような記念法話をされた。「仏教は悟りの宗教か、救いの宗教かということでありますが、両方併せて仏教というのであります。つまり智慧と慈悲の二つが成り立つことが仏教の基本であります。

地震と津波と原発の惨禍は未曾有のものであります。私共はこの惨禍をみてすぐに何かは出来ません。



ただ心を痛めるばかりです。被災地に思いを馳せて、被災された方々の苦悩と悲しみを共に傷み悲しむことしか出来ません。これを仏教では慈悲の心といいます。慈とは友情です。悲とは他へ心をふりむけることです。慈悲とはいのちあるものに対する共感の心であります。

この共感の心が生まれる時、自分はいかによいのか。何かできることがあるのではないかという思いが起こってきます。釈尊もその思いを元に法を説かれました。法を説くとはことばによつて人とつながっていくことです。それは現実に対してどれだけ役に立つかわかりません。しかし放つてはおけない。如来とあらわして念仏の法を説かれま

した。この法を聞く時、私共ははじめ兄弟で父母の物を取り合うから始まって、兄弟で分け合うということがおこります。それが社会に出て友達や先輩上司へと広がっていきます。それがお念仏の心です。お念仏はやわなものではありません。難局に当ってどんなことで



三河別院本堂にて

もお念仏を称えながら引き受けていけるものです」と結ばれた。被災地の方々に對して「友よ」という心が成立することが根本であろう。そこからできることがあるのではないかという行動がうまれる。私は節電に協力しようとして、今朝も無駄な電気を消してまわった。友よという心の成立は、自分の一番近い所の夫婦・親子・兄弟にからなされねばならない。

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に上山して

佐々木 文子

東日本大震災の直後に予定通りに
 法行された聖人の御遠忌法要に参加
 させていだいて考えさせられるこ
 とが多かった。五十年に一度という
 記念すべき年に巡り合ったことを有
 難く思う。

東本願寺の御影堂には全国から沢
 山の参拝者。整然と並べられた椅子
 席に着けば、毛布やカイロを配って
 くださる心遣いがうれしかった。

「御遠忌法要」を「被災者支援の集い」
 と変更して法要が厳修されたこと、
 被災者への温かいお心配りと励まし
 の言葉に傾きながら、お念仏の心を
 教えられ



たことで
 ある。私
 に何がで
 きるのだ
 ろうか。
 ただただ
 被災地の
 復興を祈
 り、ささ
 やかでも
 義援金を
 送った



い。普段
 の生活は
 質素儉約
 をモット
 ーにした
 い。

それに
 しても一
 回三千人
 とも言わ
 れる参拝
 者を、大
 修復工事

のさ中、沢山の参拝者を迎える準備
 が周到に計画されているのに驚い
 た。この日のために何年も準備にか
 かれた諸般のご苦労を思うことで
 ある。

比叡の山で一番印象的だったの
 は、常行三昧堂を拝観できたことだ
 った。聖人が二十九歳までお勤めさ
 れたという堂内を、お念仏申しなが
 ら竹の柵に触れながら巡ることがで
 きたのである。真宗門徒として幸せ
 を感ずるひと時であった。今でなけ
 れば見せていただけない所だったの
 である。

光照寺様には大変お世話になりま
 した。

皆様、有難うございました。合掌

共に在る

淡海 雅子

突然の激しい揺れ、とうとう来る
 べきものが来たという恐怖。東北地
 方の光景は信じがたいものであっ
 た。自分に何ができるのか考えたが、
 どうする事も出来ない。悲しみと悼
 みにくれ、心の底から動揺していた。
 そのような中で旅行には力がこも
 り、「親鸞聖人七百五十回御遠忌」を
 憶念して「東北地方太平洋沖地震災
 害被災者支援のつどい」としての法
 要にあわせていただき慈悲について
 ご法話を拝聴した。釈尊は目覚めら
 れた世界を自分一人ではなく、言葉
 によって法を説くことで自分以外の
 人々と分かちあう縁をつくられた。
 そこに釈尊の慈悲は命あるものに對
 する共感であり、共に生きてゆくこ
 とであると話された。



未曾有の震災に遭遇し、被害者を
 かわりそう
 と思いつく
 にかしよう
 と思つてみ
 ても、私が
 思うように
 助けること
 は極めて難
 しいと歎異



抄第四章
 には指摘
 してい
 る。どう
 すればいい
 のであ
 ろうか。
 「念仏も
 うすのみ
 ぞ、すえ

とおりたる大慈悲心にてそうろうべ
 きと云々」念仏だけがかわいそう不
 憫だという思いを超えて助けること
 のできる道だといわれるが、なぜ念
 仏だけでよいのかということが深層
 から領けないでいた。震災が私に与
 えた自力への絶望、良し悪しとは何
 か、価値観と人間性を根本から揺る
 がす現状、まさに白旗。記念すべき
 法要で念仏は生きてたちあがる、共
 に歩むという力強い言葉をいただい
 た。すべての存在は私が主体であつ
 ても主体ではなく、念仏が主観とな
 って私と共に生きてくださる。慈悲
 の担い手はあくまでも如来の大慈悲
 心の中にあると。ああ、申し訳ない。
 それでも自力を尽くしなんとか自分
 にできることはないのだろうかと思
 索し行動する私がいる。

御遠忌のテーマ「今、いのちがあな



たを生きている。身をもって味あわせていただき生きていることを問う素晴らしいものであった。自我の殻から抜け出せない私が大切な節目に光照寺の皆様のお陰で人として帰るべき道に出会わせていただけた。本当に有難く、南無阿弥陀仏。

被災者支援のつどい

平山正三

親鸞聖人七百五十回御遠忌(第一期法要)参拝として企画された旅行でしたが、去る三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震災害により第一期法要是中止し「被災者支援のつどい」として法会が行われることになった

が予定どおり二泊三日の行程で実施された。

初日

は、親鸞聖人や法然上人が修行をされたという比叡山へ。昼食



を比叡山境内のレストランで済まし、西塔の釈迦堂、にない堂に参拝、続いて東塔の大講堂、根本中堂に参拝する。尊い経験として、

通常修行僧しか入れないという「にない堂」の左側の常行三昧を修す阿弥陀如来を本尊とする常行堂に今回特別に入れて頂き、案内の方から厳しい修行について説明を受けた。

二日目は早朝ホテルを出発し、東本願寺真宗本廟へ向かう。法要の前に「阿弥陀堂素屋根内」の見学、阿弥陀堂・御影堂屋根・御修復のあゆみ展等の見学。その後法要会場の御影堂へ入る。堂内は全国各地より参拝された人々でいっぱい。十時より真宗宗歌斉唱で始まり、真宗大谷派門首の「宗祖親鸞聖人と、ご参集の御同朋の皆様と共に東北地方太平洋沖地震災害「被災者支援のつどい」を開催します」との開会のことばの後、勤行、宗務総長挨拶、災害救援本部長から

の報告、法話、閉会挨拶、恩徳讃斉唱と一連の法要が終了。

朝から小雪舞う京都を後に次の目的地名古屋

屋別院へ参拝。その後、高浜市やきものの里かわら美術館見学、土曜日で工場は休みであったが本山修復瓦の生産工場を見学し二日目の予定を終了。

最後日、午前三河別院へ参拝、昼食後徳川家康が生まれた岡崎城を見学し、全行程を終える。

この度は、比叡山に初参拝し、常人が入れない常行堂への入堂という尊い経験そして名目は変わっても五十年毎という御遠忌に参加できた事に感謝をしている。

この度の震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りすると共に被災さ



れた方々の一日も早い生活の安定と被災地の復興を願っています。

京都上山(旅行記)

三輪民子

去年九月三日に左の肩を骨折し治りかけた一月三十日に今度は右肩を骨折し三月二十五日までに治したいとリハビリ中の、三月十一日に震災があり、急遽第一期法要是中止となり、埼玉組としては中止が決まりましたが、光照寺は変更せず予定通り出発しました。

治療中の右肩は三角巾でつり、一番小さなキャリーバックを押して参加しました。震災のニュース原発の事故も心配でしたが、

半月も過ぎ、なんとか新幹線も予定通り運行無事京都につき、左手ではバックが思い通りにならず、小刀称夫人が引いて下さりバ





「正信偈、念仏、和讃」同

スまで行くことが出来、その後もずーと移動の度に皆さんのお世話になり大変助かりました。比叡山延暦寺では、五十年に一度の御遠忌にあわせて特別に公開され、御遠忌に上山された人達を案内されるとのことです、東塔大講堂でお話を聞き根本中堂でお参りをしました。西塔では釈迦堂と聖人御修行の跡を拝観し、法華堂と常行堂にない堂が渡り廊下でつながっているのを見てから、にない堂に入り常行三昧の説明を聞き、お堂の冷たい床を念仏を称えながらグルグル回り、孟宗竹の手摺り（誰にも届くように斜めにかけてある）にもたれたり、ほんのちよつぱり堂行三昧の体験？をしました。急に降り出した春の雪の中で素晴らしい時間を過ごし、おごと温泉でゆっくり一泊し、二十六日は真宗本廟に於て東北地方太平洋沖地震「被災者支援のつ



朋唱和で勤められ、安原宗務総長の挨拶、黒川（参務災害救援本部

とは夢のようです。同朋新聞四月号を読んでこの中に入れて頂いたんだと改めて感動しました。名古屋別院を参拝し、瓦工場見学、蒲郡温泉に泊り三日目も予定通りの充実した盛り沢山の旅行になりました。

叡山を下りた宗祖の有難さ

山田 邦興

三月二十五日（二十七日、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要団体参拝旅行に参加した。五十年に一回の法要だから、生涯の内に一回遭遇するか否かの事で、参拝出来る嬉しさは一入であった。

直前の東日本大地震で本山は法要を急遽「被災者支援のつどい」とした



常行堂は阿弥陀如来がご本尊。九十日間念仏を称える念仏三昧行は、休まないでまた眠らないで右回りに廻る。睡眠に負けそうな

為、止めにしたお寺も。本山上山：比叡山延暦寺・名古屋別院・三河別院・やきもの里かわら美術館等、盛り沢山の内容であるが、比叡山にスポットを当て、文章を書いてみたい。三月も下旬というのに、根本中堂は、底冷えがして身体の各所が空調を来すようだ。現在の我が家は空調が完備し、十分恵まれた環境に改めて感謝した次第。比叡山は過去に二・三回訪れた事があるが、ある方の計らいで、日頃見ることが出来ない処へも案内して頂いた。その一つ、渡り廊下で結ばれた法華堂と常行堂（弁慶が渡り廊下を肩で担ったので別名にない堂）がある。

時は、横に固定された竹棒に寄りかかりながらの休息だ。自力修行の凄さの一面である。聖人は、この堂僧だつたという説もある。



天台宗の教えは、「忘己利他」「照千一隅」。有難い教えで、東日本震災の義捐にも対応出来る。

実を言うと、私は現在の家内との結婚式を坂本飯室谷不動堂で挙げた。会社の先輩が阿闍梨の実弟との関係で、二千年修行を満行された酒井大阿闍梨にお願いした。導師は当時比叡山学院の院長（現在長瀬小林立隆彰師他であった）。

話変わって、親鸞聖人は二十九歳で下山された。比叡山に於ける二十一年に及ぶ修行と強靱な肉体・精神力を持ってしても自力では救われれない。法然上人との出会いから他力本願に出会う。数百年の歲月にも色褪せる事無く続く教え。改めて有難く頂きたいものと思う。合掌



寺務所より

◆法要のご案内

●孟蘭盆会法要

八月十三日(土)、午前・午後の二部厳修。

●秋季彼岸会法要

九月二十三日(金)午後一時三十分より厳修。

●報恩講

十月三十日(日)午前十一時より厳修。

◆聞法会のお知らせ

●親鸞聖人のみ教えに聞く会

毎月開催。午後一時半～四時半まで。講師は樸曉先生。和讃を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

●大経の会

七月三日、九月四日、十月二日、午前十時～午後三時まで。細川巖著 正信偈讃仰(四)を学んでいます。お弁当持参して下さい。

●我聞の会

七月二十日、九月十五日、十月十九日、午後二時～四時まで。真宗の簡要を学んでいます。講師は住職。

●微風学舎

毎月開催。午後七時～九時まで。講

師は副住職。「顕浄土」の教学・親鸞における現生不退の視座を学んでいます。日程は寺にお尋ね下さい。

◆さいたま親鸞講座

市民公開講座。午後二時～四時まで。会場は大宮川鍋ビル。八月六日、十月十五日、十二月十日、平成二十四年二月十一日、四月二十一日、六月十六日。

◆お願い

ご自宅で法事の際は駐車場をご利用下さい。宜しく願います。

東北地方太平洋沖地震の第一回義援金一七八、〇二九円を東京教区を通じて四月に送金致しました。引き続き義援金箱を設置しておりますのでご協力の程、宜しくお願い申し上げます。



俳句・川柳

吉澤 光昭

大地震に泪も枯れし弥生かな
白も好きでも紅が好き花水木
花ふぶきジョギングの脚と競いけり
山笑い期待の一步今始む

西木 順子

櫟の芽思い出すとき風にゆれ

本震のごとき余震や花終る
花びらや菓子と茶の出る里神楽

花岡 要

老人の目を樂します牡丹かな
若芝で何をはむやら夫婦鳥
手づくりの柏餅だと娘来る

河野 日出子

木もれ陽に葉のざわめきて彼岸
かな

つばめ来て水辺に影の揺らぎあり
道行きの肩にやさしき花の舞い
花冷えや熱き思いはなほ咲くら
花ぐもり心ぐもりも誘ふよな
五月晴れ深き木陰ぞ夏日影

花影 江部 良吉

里桜愛でし母なり農婦たり
人の黙怖し花影抱いてゆく
子を叱り白くなりゆく菜種梅雨
白ぼたん一弁こぼし揺れやまず
三劫の旅して来た蓮ひらく
侏儒から耳打ちされて目借時
十三姉切紙を抜け春の闇

ロスタイム未だまだ空いた席がある
いい目覚め昨日の罪を赦してる
大地震忘れ去るまで無くば良い
良きことか援助をするとロシア

山田 恒

秋 義深

草耐えて命の春萌えの頃

迄で
数多く火葬も出来ず念仏す



佐々木 玄吾

おはようと同居の子らのあいさつ
つにおはようと返し心つながる

佐々木 文子

被災地に泳ぐ多くの鯉のぼり南
無阿弥陀仏の風吹き抜ける
原発の事故収まれと祈りつつふ
くらみし花青葉となりぬ

金沢を旅して 佐藤 セツ子

柿熟るる郷行く列車の窓辺より
遠く奥能登の山なみ光る
金沢城の黒門脇の昔し家に薄倅
なりし豪姫しのぶ

裳裾史く豪姫の姿顕たせつつ狭
き座敷に一人佇ずむ
豪姫の終の住み家の石路の花茶
室の庭にひそと咲きおり
時雨降る陶芸村にふり敷けるア
メリカかえでの紅き落葉

豪姫Ⅱ前田利家の四女
河野 日出子

墓前に香り満ち満ち
かたくりの花すみれ草咲き雪割

草耐えて命の春萌えの頃

桜花愛しき我子連れ去りていと
も盛りを咲けるものかな

花筏乗って我子の迎え来ぬちよ
つと待つてねまだまだこの世で
せにやならん大事なことの有り
そうな

数独を解く術あれど我が心癒や
す術なし春おぼろ

ゝたらゝればのくり返し悔やむ
私に阿呆や阿呆やとアホウドリ
桜咲く四月に生まれ桜散る四月
に逝きぬ我子よ何の因果でしよ
う時の流れと儚きものや 桜花

赤秀 品枝

あどけなき寝顔いとしく願わく
ば悪夢であれと津波の光景

発熱の知らせを受けてとにかく
もビル風の中をそそくさと

篠原 潤子

朧月被災地の空でてるかな傷つ
きし方達照らせやさしく

一瞬で生死を分ける大津波我が
ふるさと^{（故郷）}の海も^{（海）}孕みぬ

枕元にラジオケイタイ電池置く
夜中の地震に備える癖なり

愛犬もテレビの地震速報にすぐ
に反応玄関に走る

助けるゾ必ず必ず助けるゾ弥陀
の誓願お念仏唱う

◆子供会のご案内

坊守と大塚陽子氏が中心
となり、季節ごとにタイ
ムリーな企画をして、子
供が遊びを通して楽しみ
ながら、仏法の環境に浸
れることを目指してま
す。また、お寺の行事と
コラボレートすることも
あります。興味がある方、
小さいお子様がいらっし
やる方はお寺までお問い
合わせください。次回は、
八月十九日（金）にデイ
キャンプを企画中です。



梵鐘

今回の東日本大震災の復興
は容易ならないものを感じる。
福島原発の土地を元の更地に
返すのに二十年かかるという。
住居地域は津波の来ない高台
にするのがよいという案も出
されている。これから復興に
関する様々な案が出されて検
討されることであろう。現役
から退いた高齢者の身にはよ
い案を出す智慧もなく援助す
る資金もない。街頭に立つて
募金活動をする元氣もない。
わが身に可能なことは何か
と考える。それは被災された
方々の苦悩や悲しみを共に傷
み悲しむことである。そうし
て、今日の日、今日の日一
をしつかり歩みましょうと伝
えたい。

現役の方々から復興に向け
て、よい案が出てくると思う。
それを支持して大きな力とし
て復興に協力したい。（玄吾）



花岡 要 画